

# 『出血時間について』

## (1) 出血時間について

血液検査の中には、出血時間という検査があります。

耳たぶに小さな傷をつけ、自然に血が止まるまでの時間を測定する検査のことで

【基準値1～5分】

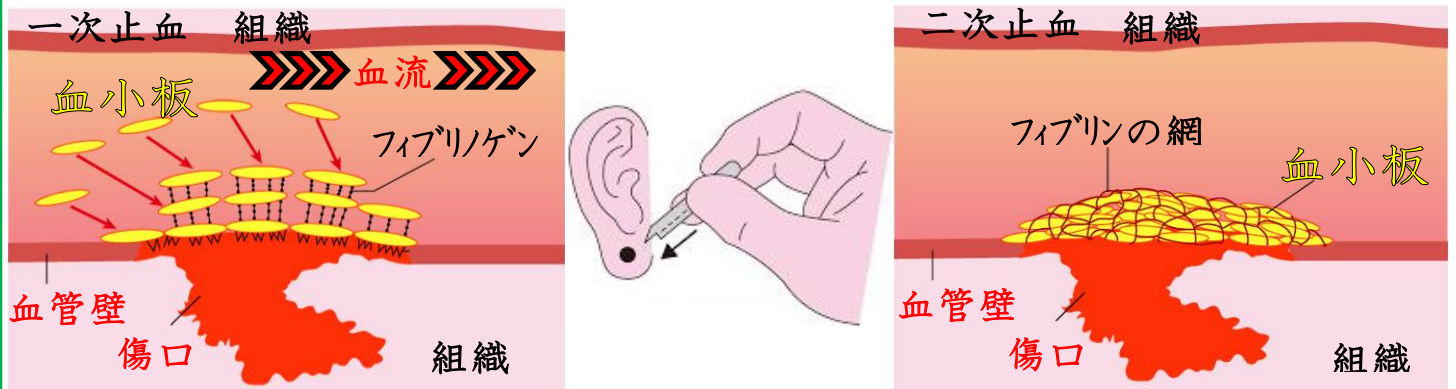
## (2) 出血時間でわかること

出血した血液が自然に固まるまでの時間を調べることによって、それに関わる血小板の機能（粘着能力と凝集能力）と毛細血管の状態がわかります。

手術前などには傷からの出血が止まるか否かを検査しておくことは重要になります。

では、血が出ている部分では出血が止まるまでにどんなことが起きているのでしょうか。

血には一次止血と二次止血があります。一次止血は血管が破れ出血すると血管の壁は収縮し、血小板という細胞が集まり傷口をふさぐまでです。そのあとの二次止血は、そのふさいだ部分を頑丈にするためにタンパクの一種である凝固因子が働き、フィブリンという網の目のネットが作られ、集まった血小板を覆うことで血がとまることなのです。



一般社団法人 日本血液製剤協会 一部改変

「出血傾向」は上記の止血を担う色々な因子が異常になることで発症します。人間の体の仕組みには、出血すると血液中の血小板と様々な因子（凝固因子）の連携により血液を止めようとする働き（止血機構）があります。この働きがうまくいかないと出血傾向がみられます。出血傾向の原因には血小板の異常、凝固因子の異常、他に線溶系の異常、血管の異常、血流の異常などがあります。

## ◆検査を受けるときの注意

検査前に運動をしたり、耳たぶをもんだりすると、正しく測定できなくなります。

※あくまで目安です。個人差もありますので自己診断はせずに診察、検査を受けることが重要です。

しらにわびょういん  
検査室ニュース

2017年  
12月号  
通巻  
第14号



発行元：白庭病院 検査室  
生駒市白庭台6-10-1  
TEL(0743)70-0022  
年2回発行(6・12月)



# 臨床検査室へようこそ！



臨床検査室では、臨床検査技師が血液や尿などから分析する検体検査と心電図や超音波検査などの生理機能検査を行っています。  
これらの検査は、病状把握や診断に欠かせない大切な情報ですので精度の高い迅速な報告を心がけています。

## ◆紫斑（しはん）とは？

紫斑とは、皮下組織内の出血によってみられる出血斑です。病変部は赤紫色の点状や一様な広がりをもってあらわれます。これは血管が脆くなった事や血管内の閉塞などが原因となって起こります。

この紫斑が主な症状となるものをまとめて紫斑病といいますが、代表的なものを紹介します。



たんじゅんせい

### ・単純性紫斑

単純性紫斑は、手足、特に下腿の皮膚の表面に多数あらわれる、米粒大から粟粒大の点状の出血斑で、20代の女性に多くみられます。原因は不明ですが、過労や生理などで悪化しやすく、毛細血管の脆さが関係するものと考えられています。

ろうじんせい

### ・老人性紫斑

老人性紫斑は、高齢者に多くみられるもので、外的刺激を受けやすい両前腕および手背によくできる、暗赤紫色の出血斑です。これは、加齢による皮膚や血管の弾力がなくなってきたことによるもので、わずかな打撲でも、不規則な形状の紫斑があらわれてきます。痛みはほとんど無く、数週間で自然に軽快します。

まんせいしきそせい

### ・慢性色素性紫斑

慢性色素性紫斑は、主に下肢に多数の点状の紫斑ができ、徐々に進行して大小さまざまな紅褐色の色素斑になるというもので、大きくなると、辺縁が不規則な形になります。中年以降に多くみられ、しばしば慢性化します。

### ・アレルギー性紫斑病

アレルギー性紫斑病は、血管が炎症を起こして、主に手足、特に下肢に多数の紫斑を主とした症状があらわれる疾患で、好発年齢は4～7歳です。紫斑の色調や形状は様々にあらわれます。

とくはつせいけっしょうばんげんしょうせい

### ・特発性血小板減少性紫斑病

特発性血小板減少性紫斑病とは、何らかの要因により血小板数が減少し、いろいろな出血症状を引き起こす病気のことです。

検体検査は、患者さまから直接には見えないところで検査をしています。貴重な検体(検査材料)を正確にかつ迅速に検査することで、患者さまの健康維持に貢献しています。